

## 文学博士今堀誠二君の『中国封建社会の構造—その歴史と

### 革命前夜の現実—』に対する授賞審査要旨

本書は、第二次世界大戦の末期、一九四四年の五月から十二月までの間に、著者が内蒙古の察哈爾・綏遠兩省にわたって、中国社会を自ら現地調査した結果をまとめた報告書である。

最初に「プロローグ」として、(一)社会調査・(二)史料採訪・(三)文献調査の三項目について、先人の研究を振り返りながら調査研究の方法を説明している。本文は六部に分かれる。第一部は「都市」と題して、(第一編)包頭と(第二編)張家口を取扱っており、第二部は「港市と港町」として、(第一編)河口鎮・(第二編)南海子を、第三部は「県」として、(第一編)豊鎮・(第二編)薩拉齊・(第三編)托克托を、第四部は「鎮」として、(第一編)畢克齊・(第二編)察素齊・(第三編)可可以力更を、第五部は「村」として、(第一編)白塔・(第二編)鄂爾格遜・(第三編)什方鄧及び城墻・(第四編)大樹灣を取りあげている。著者はこれらの各地に赴いて調査を行い、古老などの多くのインフォーマントに面接して聞き書きを作り、古文書・碑文・匾額などを筆写・蒐集し、また広く各種の文献を調査してこの報告書を作成しており、各編の終りには著者の採録した各種の「資料」を掲載している。第一部から第五部までは、地区別に大小各種社会集団の構造と機能を詳細に記述したもので、基本的な新資料を学界に提供している。今堀君の調査は、各地の廟を中心として進められたものであるが、廟は宗教施設であると同時に、公共の場所として村役

場やギルドの公所がほとんど廟に置かれており、そこに碑を立てて規約などを公示することも多かったので、豊富な資料を集めるのに成功している。著者が調査の対象としたのは、遊牧・農耕両地帯の境界に接しており、清朝の間に中国人が移住して開拓したところが多く、歴史的な沿革が比較的によく解り、村ができ、村から鎮へ、更に県へ、大都市へと発展して行く過程を辿ることができる。

第六部は「内蒙古の都市と農村」と題されており、著者はここで第一部から第五部までの記述を本として、この地方の都市・農村の社会的特質をまとめて論述している。

第一編「農村」では内蒙古の開発の歴史を概観し、中国の本土から新天地を求めて内蒙古に流入した難民に、地主であった「地商」が生活資金を貸与して開墾に当らせ、土地を小作させると共に、私兵を用いて外部からの攻撃から彼等を守ったこと、これらの小作農が次第に地商の支配を離れて「地戸」の地位に上り、乾隆年間（一七三六—一七九五）以後には地戸が農村経済を動かす中心勢力となり、富農となるものもあつて、やがて大部分の農民が土地を所有するようになったことを述べている。村落を代表する社会集団としては公社があり、それはもとは地商が組織したもので、後になってすべての土地所有者によって構成される組織体となったが、実際には有力な地商や大地戸が支配していたこと、公社が治安の維持や外敵に対する防衛に当り、ある種の裁判権を持ち、税の徴収にも任じたこと、また灌漑施設と結びついた水利団体が存在し、村の枠をこえた村落連合が生れていたこと、などを説明している。

第二編では「鎮」を取扱う。鎮は県城と農村との中間の地位にあり、県城に隸属すると同時に、傘下の農村をまとめて、これを代表する性格を持っている。鎮の住民としては農民と商工業者が並存し、全住民の参加する集団支配体

制として、農業と商工業の両者を包括した形の鬮鎮（大行）が作られていたこと、主要な農産物は野菜・タバコなどの換金作物であり、また水利権が売買し易くなっていたこと、鎮には商業と小規模な工業があり、技術の水準を保つための徒弟制度が生まれ、理髪業・大工・運輸業などの業種には小規模のギルドができていたが、個人店舗が多く、資本を集める合夥制は未熟であったことなどを記している。

第三編は「都市（県城）」である。県城は地方官庁の存在する政治中心であると同時に、全県の経済を統括する経済中心であり、合夥制度が発達し、銭舗が活動して紙幣を発行しており、徒弟制度が整備され、運輸業が成立している。そして県城の社会組織は全面的に各種のギルドによって構成されていること、金融業・仲買業・卸小売業・手工業・交通運輸業など、各種のギルドが存在するほか、幾つかのギルドが集まって、全市組織としてのギルドマーケットが作られており、その事業は税金の徴収をはじめとする官民の連絡、紙幣の発行その他による通貨の安定、度量衡の検査統一、県内の紛争の調停と裁判、城砦の築造と傭兵による県城の守護、治水・消防・学校・道路・祈雨その他の公益事業のほか、福祉事業・宗教事業にも及んでおり、また県城においては同じ職人同志が、居職人と旅職人とを問わず団結してギルドを組織していたことなどが述べられている。

第四編では「大都市」として張家口と包頭が取扱われているが、これらは基本的には県城と同じ性格のギルド都市であり、ただ蒙古・ロシアとの間の対外貿易、新疆との間の遠隔地商業が特に重要な役割を持っていると同時に、県城と比べると資本の規模が大きく、外国に支店を持ち、事業所が城砦の様相を呈したり、歩兵騎兵を養って自らの隊商を保護していたものもあつたこと、また遠隔地貿易にともなつて駅が生まれ、黄河の水運の拠点として河口鎮・

南海子の発展したことなどが説明されている。

本書は現地調査の報告書であると同時に、清朝時代からの沿革をたどることに力が用いられており、「ギルド」の組織と機能の解明に重点が置かれている。副題には「その歴史」とみえているが、著者が取扱ったのは主として清朝の乾隆時代以後である。著者の使用した用語や本書の題名については異論があり、著者自身が述べているように、この調査で尽されていない問題が残っているけれども、本書には著者が政治情勢の甚だ不安定な時期に危険を冒して単独で遂行した現地調査の成果が、その後の文献調査と相まって、よくまとめられている。中華人民共和国の支配が浸透して、全面的に変化する直前の伝統的な中国社会の実状を、歴史的な背景と共に解明した業績として頗る貴重である。